

JPタワー学術文化総合ミュージアム
インターメディアテク

JP Tower Museum

INTERMEDIATHEQUE

ミュージアム基本情報

[施設公式名称] JPタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」

[施設通称] インターメディアテク

[所在地] 東京都千代田区丸の内二丁目7番2号 JPタワー2・3階

[施設総面積] 2,938㎡

[開館日] 2013年3月21日

[入館料] 無料

プロジェクト概要

[プロジェクト名称] 日本郵便・東京大学産学協働プロジェクト「インターメディアテク」

[事業主] 日本郵便株式会社

[総合監修] 東京大学総合研究博物館館長 西野嘉章

[ミュージアム企画] 東京大学総合研究博物館

[ミュージアム設計] 東京大学総合研究博物館インターメディアテク寄付研究部門
+株式会社丹青社+株式会社SIMPLICITY

[展示デザイン] 東京大学総合研究博物館インターメディアテク寄付研究部門

[技術管理] 株式会社丹青社

組織構成

館長:

西野嘉章 (東京大学総合研究博物館館長／博物館工学・美術史学)

副館長:

野村 洋 (日本郵便株式会社不動産部長)

研究部門:

東京大学総合研究博物館

関岡裕之 (インターメディアテク寄付研究部門特任准教授／博物館デザイン)

松原 始 (インターメディアテク寄付研究部門特任助教／動物行動学)

菊池敏正 (インターメディアテク寄付研究部門特任助教／文化財保存学)

寺田鮎美 (インターメディアテク寄付研究部門特任助教／文化政策・博物館論)

大澤 啓 (インターメディアテク寄付研究部門特任研究員／美学・美術史学)

中坪啓人 (インターメディアテク寄付研究部門特任研究員／動物学)

上野恵理子 (インターメディアテク寄付研究部門特任研究員／建築・美術解剖学)

森 洋久 (国際日本文化研究センター准教授・インターメディアテク寄付研究部門准教授／情報工学)

滝沢直己 (インターメディアテク寄付研究部門特任教授／服飾デザイン)

緒方慎一郎 (インターメディアテク寄付研究部門特任准教授／博物館運営学・空間デザイン)

洪 恒夫 (ミュージアム・テクノロジー寄付研究部門特任教授／展示デザイン)

松本文夫 (ミュージアム・テクノロジー寄付研究部門特任准教授／建築学)

白石 愛 (ミュージアム・テクノロジー寄付研究部門特任助教／博物資源学・日本史学)

御挨拶

東京中央郵便局の旧局舎は、1931年の竣工以来、郵政事業の中核施設としての役割を果たして参りましたが、このたび通信省技師吉田鉄郎の設計による建物の一部を保存・再生しながら、「JPタワー」としてグランドオープン致しました。昨秋10月に保存復原が完成した東京駅と並び、丸の内駅前広場に面する街区には昭和初期の創建当初の景観が再現されることとなりました。歴史と未来、全国各地と東京をつなぐこの場所が、東京大学と日本郵便との産学協働プロジェクト「インターメディアテック」の活動拠点です。

郵便局は、明治4年（1871年）の郵便事業創業以来140有余年にわたり、皆さまの安心と信頼を礎に郵便・貯金・保険のサービスを提供して参りました。今後は、「総合生活支援企業」として全国のお客さまの安心・安全、快適、豊かな生活・人生実現のサポートをして参ります。その一環として、周辺地域はもとより全国から東京を訪れる多くの方々が、「インターメディアテック」を通して東京大学総合研究博物館が表現する「これまでにない新しいミュージアム」を体験する機会をご提供できることは、全国の地域コミュニティに密着しながら事業を行う私どもにとって非常に意義深いプロジェクトとなりました。

このプロジェクトが地域の賑わい創出に資すると共に、広く皆さまに愛される施設となることを願ってやみません。

日本郵便株式会社

代表取締役社長 鍋倉 眞一

御挨拶

「インターメディアテク」は、日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館（UMUT）の協働運営になる公共施設であり、学術の普及と啓蒙を通じ、社会へ貢献することをその使命としています。

この施設には、東京大学が明治10（1877）年の創学以来蓄積に蓄積を重ねてきた学術文化財が常設されています。展示に用いられているケースやキャビネットは、大方が教育研究の現場で使われていたものです。帝大時代のもが多く、それらのかもし出す重厚な雰囲気、19世紀へタイムスリップしたような気分にとらわれる方もあろうかと思えます。ですが、われわれの狙いは、博物学の全盛期であった19世紀から高度情報化を実現した21世紀まで、三世紀にまたがる時代を架橋することにあります。来るべき時代の精神がこの先もお見失ってはならない「世界の眺望」を提示してみせること、それがわれわれの企図するところなのです。

ミュージアムは、これまで文化財の保管庫であり、列品の場所であると考えられてきました。しかし、そうした機能を充足しただけでは、21世紀の社会的な要請へ十全に応えることができなくなっています。現代のミュージアムは、われわれ人間が自分たちを取り巻く世界をどのように受け止めてきたのか、その俯瞰的な眺めを末永く存続させるための場所であるというだけでなく、そこに集められたモノやコレクションからどのような新しい知見や表現を導き出すことができるか、その可能性を探求し、提示する場所でもなくてはならないのです。それを、多様な表現メディアの対話を通じて試みる実験のアリーナ、それが「インターメディアテク」なのです。

歴史的な学術標本は、たしかに過去の遺産です。しかし、同時にそれは、われわれが現在から未来に向けて活用すべきリソースでもあります。このことを実証してみせるべく、われわれは歴史的な遺産を可能な限り収集し、それらを現代のニーズに叶うよう、装いを改めて再利用することにしました。資源獲得やエネルギー供給に限界が見え始めた現代社会にあって、蓄積財のリ・デザイン活用は人類にとって喫緊の課題のひとつであるといっても過言ではありません。そうした認識に立って、われわれは先端的なテクノロジーと伝統的なモノ作り技術の融合を図りながら、今後の活動に取り組んでいくことになります。われわれが謳う「Made in UMUT」の掛け声には、来るべき世代に向けてのささやかなメッセージが込められているのです。

「インターメディアテク」が、多くの方々に愛され、その支援にささえられ、発展しますことを念じてやみません。

館長
西野嘉章

05

三世紀を架橋する — 「インターメディアテク」の概要 西野嘉章 (館長)

そもそも「インターメディアテク」(IMT)とはなにか

東京大学総合研究博物館と日本郵便株式会社の連携の基に運営される「インターメディアテク」(IMT)の名称を、あえて日本語に訳すなら「間メディア館」とでもなるか。このことから自ずと明らかな通り、JPタワー内に創設された新文化活動拠点では、各種表現メディアの先駆的・創発的な融合が試みられる。それにより、ミュージアム事業の拡大を目指すと同時に、「統合的ミゼオグラフィ」なる新たな表現コンセプトを、21世紀の総合的文化事業の可能なるあり方として例証してみせる。

これまで、博物館、美術館、文書館、資料館など、広義の意味で「ミュージアム」と見なされる文化施設は、歴史や自然、芸術、科学、技術など、専門分野や個別領域で縦割りに分別されてきた。それら専門個別に特化された存在様態は、学術研究や展示活動など、施設の管理運営や人員の組織整備の面で、なるほど効率的ではあったが、企画の構想や展示の手法が個々の領域内に自閉する傾向が強く、「ミュージアム」概念それ自体を陳腐化させる要因にもなった。もし、国内の「ミュージアム」事業にかげりが見え始めているとしたら、それは組織の硬直化、展示の陳腐化に起因しているのである。

「インターメディアテク」(IMT)は、現行の国内法が歴史的な文化財を扱うと定めている「博物館」、あるいは美術に関する資料を扱うと定めている「美術館」の、いずれでもあり、またいずれでもない、という特異な位格を有する。この、いうならば「第三のセクター」に属する社会教育施設概念を確立することによって、欧米先進国で緒から当然のこととされてきた、博物館・美術館間のコレクションの流動と、企画、運営、組織の相互乗り入れを促し、国内のミュージアム世界の活性化に寄与したい。

「ミュージアム」を標榜しない実験的なミュージアムすなわち、博物館施設をただ単なる保存、列品、公開の場としてでなく、各種メディアの融合を促す表現、創造、発信の場に転換しようとする企図の点で、この統合的文化創造実験館は、既存の美術館・博物館等と一線を画する。従来のミュージアムと異なるのは、常設展・企画展の実現、コレクションの収集・研究、鑑賞機会の提供を、学芸事業の究極的な到達目標(ゴール)とするのではなく、常設展や企画展の会場、あるいはコレクションの取蔵展示の空間を、多様な表現メディアが出合いを演じる舞台(プラットフォーム)ないし背景(ランドスケープ)として位置づけているからである。

こうした企図のもとに設えられた展示空間のなかで、いったいどのような文化創造、文化発信、文化融合、文化統合が実現できるのか、それを問うのが「インターメディアテク」(IMT)である。

「デザイン資源」としての学術遺産

人類は持続可能な共生社会の実現に迫られている。とすれば、われわれがすでに掌中にある備蓄資源のもっとも有効な活用、さらにはそれらのリサイクル活用の推進は、喫緊の課題と言わねばならない。

総合研究博物館は、国内の他の教育研究施設・博物館のどこよりも早く、備蓄された学術標本を、博物的な価値を有する貴重な有用資源として再評価・再活用する方法の研究に着手し、それを実証してみせる試みを続けてきた。この試みの成果は、1994年以降すでに20回以上を数えるに至ったシリーズ企画展「東京大学コレクション」と、その内容をデジタル・アーカイブ化した博物館学術情報データベースを通じて、広く一般の知るところのものとなっている。

こうした事業を遂行するなかで得た論点のひとつ、それはアートとサイエン

スが一般の想像する以上に近接した関係にあり、学術の遺産はまた、芸術の「デザイン資源」としても、活用可能であるという現実である。アーティストはサイエンスから多くのことを学び、それを作品制作に活かしてきた。サイエンティストもまた、アートの特権である創造力・想像力の働きから着想を得ることがしばしばある。それが紛れもない事実であるにもかかわらず、「アート&サイエンス」の協働の歴史を、モノの「かたち」、デザインの「意匠」を介して実際に役立てることのできる社会教育施設が、国内にはまだ存在していない。われわれがモノの「かたち」やデザインの「独創性」に拘りをもつ所以である。

「アート&サイエンス」の両者に共通しているのは「かたち」という視覚的な要素であり、それらに関わる様々な活動領域のどこにあっても、われわれは来るべき世代に対し、然るべきかたちでの遺産継承を円滑におこなうべき使命を負っている。そのため、「インターメディアテク」(IMT)は、多種多様な創造分野を横断的に結び、様々な実験を繰り返し試みることで、従前にはない成果を獲得する場と位置づけられる。「アート&サイエンス」を結ぶ、視覚的・造形的要素をどのように「デザイン」するか、そうした課題設定のもとに、一般の美術館・博物館のおこない難い活動と取り組み、未開拓・未着手の文化分野に新たな道筋をつけたい。

旧中央郵便局舎の「転生」と「継承」

昭和6(1931)年竣工の5階建て旧東京中央郵便局舎は、逓信省経理局管轄課の建築家吉田鉄郎の設計になる。吉田は設計の任務を負い、台頭著しいヨーロッパの新興建築の機能主義的な建築観を郵便局舎の設計に生かした。爾来、丸の内の郵便局舎は昭和初期のモダニズム美学の粋を集めた類稀な建物として知られることになった。戦前に日本を訪れたドイツ建築家ブルーノ・タウトは、この建物を日本の新建築の最高峰に位置するものとして賞賛している。

旧局舎は集配、窓口、事務など、多様な機能を組み込んだ大建築であるが、適確な機能配置と立面構成にはいささかの破綻もない。吉田は昭和8(1933)年10月号の『逓信協会雑誌』のなかで、次のように書いている。現代建築の様式は、個々の建築の機能、材料、構造等から必然的に生ずる建築形態を最も簡明に表現することにより定まる。本庁舎においても、鉄骨鉄筋コンクリート構造法を利用して窓面積をできるだけ大きくし、無意味な表面装飾を廃し、純白の壁面と純黒の枠をもった大窓との対照により、明快にして清楚な現代建築を求めることに苦心した。……室内意匠においても、また外観と同様に形態と色調の単一を計った。郵便物の集配業務に充てられた大空間は、日本の伝統建築に通じた、単純にして明晰な各部を留めており、モダニズム建築美学の逢着点を示す貴重な歴史遺産となっている。

「インターメディアテク」(IMT)は旧局舎の2階と3階に開設されている。古い建物を別の用途に転用すること。これはすなわち、歴史遺産を「転生」させること。持続可能な都市運営を実現するにはどうしたら良いか、その答えを探ることに他ならない。パリでは鉄道駅がオルセー美術館になり、ロンドンでは火力発電所がテイト・モダンに生まれ変わった。国外ではそうした例が数多存在する。というより、20世紀末以降、そうした事例はヨーロッパでもアジアでも、文化施設建設事業の主流となっている。国内にもすでに先例がある。明治9(1876)年に造営された旧東京医学学校本館は、昭和46(1971)年に国から重要文化財としての指定を受け、それが東京大学総合研究博物館小石川分館へと改装され、一般に無料公開されている。東京駅前では、国の郵政事業を担ってきた歴史建物が文化創造施設に生まれ変わった。

郵便局舎を再生させるにあたり、オリジナルの大規模空間はそのまま活かされることになった。「インターメディアテク」が入居する旧局舎西側部分は、長さ66メートル、幅12メートル、階高5.5メートルに及ぶ大空間

を包摂している。東京都心部ではもはや得がたい長大空間であり、欧米の主要ミュージアムの展示室と比較しても引けを取らない規模を有する。大空間を小空間に細分化することなく、そのまま活かす。そのこと自体に保存上の意義がある。この歴史性を帯びた大空間は、多様な表現メディアの融合を促すためのプラットフォームとなる。内部空間を画定する基本構造をそのまま残し、歴史の刻まれた木製床材もまた保存部の一部に「継承」された。古い鋼鉄製窓枠の一部は展示用フレームに「転生」し、郵便局カウンターの御影石や重厚な扉など、歴史の痕跡を留める建築部材もまた、一部ではあるが施設空間のなかに埋め込まれた。「インターメディアテック」は、かけがえない歴史遺産の「転生」と「継承」の上に建つ。

基本理念としての ReDESIGN+

たしかに、資源枯渇が叫ばれる時代ではある。とはいえ、利用可能なリソースは確実に存在しており、既得資源のリサイクル活用を必要とする機会も視野も、いや増しに拡大しつつある。改装も、再生も、蘇生も、根本においては、リサイクルを実現するための ReDESIGN+ プロセスの結果に他ならない。ばかりか、「無から有は生じない」の公理を信じるなら、独創的とみなされる創造でさえ、与件として存在するものの ReDESIGN+ の成果物でないとは言いきれない。

古い建物を改修し、新しいミュージアムへと生まれ変わらせる。これは ReDESIGN+ である。ひとたび役立てられた展示コンテンツを、あるいは別な文脈へ移し替えることで、あるいは別なコンテンツと組み合わせることで、新しい展示として蘇生させる。これも然り。古い学術標本のなかから、フォルムやテキスチャーの面白いものを選び出し、それらを靈感源として、時代の求めるモードやプロダクトを新たに生み出す。これもまた、ReDESIGN+ でなくて何であろうか。古くて使い物にならなくなった（とされる）、研究室や実験室の什器や建築部材を回収し、必要とされる加工を施し、利用可能なオフィス家具や展示什器として再生させるというのも、立派な ReDESIGN+ である。

しかし、だからといって、ReDESIGN+ を、ただ単なる装いの改変と考えてはならない。ReDESIGN+ は、日本語の「デザイン」という言葉がそうであるように、見かけの問題であると同時に、モノの見方や世界の見方に関わる認識論的な問題提起でもある。これまでと違った素材観や世界観の上に立って、それまで認められずにあった価値や魅力を発見する。そのために、厳めしい学術や狭隘な専門のクビキを離れ、自由にモノを眺める、その自在にして柔軟な思考の在り方が求められているということである。

新たに発見した価値を他者に認めさせるため、説得力のある方法で装いを整える構成員も必要となる。縦のモノを横にする、あるいは横のモノを縦にする、という単純な操作を加えるだけで、同じモノがそれまでとまったく違ったモノに見える。もしそうであるなら、これこそが究極の ReDESIGN+ に他ならない。ミニマルな操作で、どこまでモノの存在価値の射程を拡大できるか、それが問われているのである。

もちろん、ReDESIGN+ はモノのすがたを変容させるだけにとどまらない。見慣れた日用品や古くなった廃棄物を価値ある文化財へ、学術標本をアートへ生まれ変わらせること、すなわち意味や価値や用途を創出する試みでもあるからである。アートの方法としてのモニタージュやコラージュがそうであるように、モノが本来有する文化的・社会的・学術的な意味の再構築につながるという意味は、モノが継がされてきた価値の総体を脱構築（デコンストラクション）する操作であると言っても良い。

基調としての「レトロ・フューチャリズム」

旧庁舎が昭和初期を代表するモダニズム建築であるという与件を踏まえ、

常設展示スペースならびに準常設展示スペースは、レトロモダンの雰囲気を感じ出す空間演出をデザインの基調とした。展示空間内には、建物のオリジナル・デザインを尊重し、必要不可欠な場所を除いて、固定型展示ケースなど作りつけ什器を設置していない。かわりに、21世紀の感受性に働きかける折衷主義的様式美——仮称「レトロ・フューチャリズム」——の実現を企図した。このことにより、19世紀から21世紀まで、足かけ三世紀に亘る時代を架橋して見せる。それが「インターメディアテック」(IMT)のデザイン戦略の基本となった。

この企図に従い、博物館に保存蓄積されてきた戦前の木製什器を ReDESIGN+ し、積極的に再利用した。アルミニウム・ブロックによる什器の高さの嵩上げシステムは、このための考案のひとつである。既存の古什器活用の方針は、有限資源の循環型リサイクル、エネルギー負荷の低減下を、事業推進上の諸原則のひとつに掲げる「インターメディアテック」(IMT)の思想に合う。

一方、モダンの感覚を生み出しているのは、肉厚グリーンガラスを主材料とする「レトロ・モダニズム」様式の組み立て式展示ケースである。それらは UMUT works のオリジナル・デザインであり、「インターメディアテック」(IMT)のプロダクト・デザイン研究の成果の一部である。また、各種標本を展示するのに必要となる展示具についても同様である。木製のもの、真鍮製のもの、鉄製のものなどを、19世紀博物学の伝統を踏まえた「レトロ・モダニズム」様式で自主制作し、独自開発のプロダクト・デザインとして公開することにした。

以上の通り、「インターメディアテック」(IMT)の常設展示ならびに準常設展示は、木製什器、肉厚グリーンガラス製ケース、金属製の付属物で、19世紀様式と21世紀デザインを架橋する「レトロ・フューチャリズム」様式で構成されている。採光については、昼間の時間帯には、可能な限り北側壁に切られている大窓から射す外光を、遮断することなく、効果的に利用することにした。人工照明は間接光の導入を図り、それを補うものとして天井に目立たないように敷設されたレールに可動式照明ランプを配した。

間接照明については、「インターメディアテック」(IMT)の独自の考案として、スタンド型照明器具を一部に導入した。この間接照明システムは、19世紀型展示様式と21世紀デザインを直結させる上で、重要な役割を果たす。椅子、机、棚など、来館者用ならびに事務用什器についても、可能な限り教育研究用をベースとする、オリジナル・デザインの導入に努めた。

ランドスケープを織りなす学術標本

常設展示の中核をなすのは、総合研究博物館の研究部ならびに資料部17部門の管理下にある自然史・文化史の学術標本群である。博物館の「インターメディアテック」(IMT) 寄附研究部門では、丸の内の開館に向け、各種動物の骨格や剥製の収集・制作を進めてきた。とくに、ミンククジラ、キリン、オキゴンドウ、アカシカ、アシカの現生動物、さらには幻の絶滅巨鳥エビオルニス（通称象鳥）などの大型骨格については、開館時の常設展示が最初のお披露目の場となる。また、(旧) 医学部旧蔵の動物骨格標本と教育用掛け図も、本格的な公開は今回が初めてとなる。

07

これらの範疇に属するものに加え、レプリカや複製の創造的な活用についても積極的に取り組んできた。もともと体重が重いとされる絶滅鳥エビオリス、もともと身長が高いとされる絶滅鳥モアの巨大卵殻、世界最大のワニと目されるマチカネワニの交連骨格、さらにはペルーのクントゥル・ワシ遺跡で発見された南北アメリカ大陸最古の金製王冠、人類進化の歴史を塗り替えたラミダス原人化石歯の第一号標本、19世紀に制作された巨大ダイヤモンド・コレクション、世界最大金塊、世界最大白金塊、弥生時代の名称の起源となった第一号壺型土器など、専門研究の枠を超え、社会的に大きなインパクトを与えた歴史的標本を精巧なレプリカで見ることができる。

歴史的な標本として博物館資料部岩石・鉱床部門所蔵の「被爆標本」も特記に値する。被爆直後に東京帝大の学術調査隊が長崎浦上天主堂で回収した「獅子頭」は、「被爆標本」コレクションのなかでも、出自来歴を確認することのできる貴重標本のひとつである。

また、学外の機関・団体からのコレクションの寄託ないし貸与もいくつか実現した。主なものとして、財団法人山階鳥類研究所の所蔵する本剥製標本（多くは昭和天皇旧蔵品）、江上波夫収集の西アジア考古資料コレクション、岐阜の老田野鳥館旧蔵の鳥類・動物標本、江田茂コレクションの大型昆虫標本、仲威雄収集の古代貨幣コレクション、奄美の原野農芸博物館旧蔵の上記マチカネワニを挙げるができる。そのほか、個々の名前は挙げないが、個人篤志家から寄せられた多くの寄贈品が展示に供されている。今後ともなお、貴重な学術標本コレクションの寄贈と貸与については、積極的にその実現を促していくことになる。

総合研究博物館小石川分館に収蔵されていた、明治・大正・昭和前期の歴史的な学術文化財コレクションも、収蔵用什器を含め、展示に供されている。

展示コンセプト

展示物の配置にあたっては、来館者導線を想定するという常套的手法をあえて採用しなかった。また、展示物を分野ごとに分類する方法も採っていない。あるいは展示コーナーごとに、あるいは展示ケースごとに、一群の標本コレクションが並べられているが、個々の展示単位に学術的な相互関係があるわけではない。教条的な展示解説至上主義を回避し、むしろ「眼の愉悅」への訴求に重点を置いたためである。

19世紀的な意味での博物学は、そもそもが予期せぬ出会い、思ひかけぬ発見を前提とするものであった。20世紀は19世紀博物学が有していた「混沌世界」を、学術の名のもとに葬り去った。標本庫を整理し、より合理的な世界へと再整備することを是とし、それに邁進してきた。しかし、その結果はどうであろう。理解し易いものが善とされ、すべてが平均化、平準化し、はては陳腐化を招くことになった。その結果、ミュージアムでの鑑賞体験も、特段に珍しいことでなくなり、より「文化度」の高い市民生活が実現しつつあるというのが、一般的な理解である。しかし、本当にそうなのか。

自分の眼で見て、発見し、驚くという体験の場を、来館者、とりわけ若い世代に体験させる場としてのミュージアム空間。「インターメディアテク」(IMT)の目指すものはそこである。

企画運営

「インターメディアテク」(IMT)の企画運営は、総合研究博物館に附設された寄附研究部門が、博物館研究部教員組織ならびに同資料部門と連携を図りつつ、これを担当する。したがって、これまで本郷キャンパスの本館でおこなってきた学術研究成果の公開、あるいはキュラトリアル・ワークの成果の公開、東京大学コレクションの公開など、大学博物館としての基本的な展示企画は、「インターメディアテク」(IMT)においても、企画展示室を使っ

て随時開催することになる。

企画展のスペースは、原則として、2階の「ファースト・サイト」と「グレイキューブ」、3階の「モジュール」の3ヶ所であるが、企画の内容に応じて周囲のスペースに拡張を図ることもできる。また、常設部についても、随時、展示ケース内のコレクションを入れ替えることとし、来館者に対しつねに新しい展示物との出会いが可能となるようにする。

また、様々な表現メディアとの融合を図るため、国内外で活躍する専門家に「特任キュレーター」としてテンポラリーな企画への参加を促す。当面、活動参加が予定ないし期待される分野として、演劇、ダンス、映画、音楽（クラシックと現代）、写真、デザイン（グラフィックとプロダクト）、建築、モード、文学、パフォーマンス、コンテンポラリー・アート、博物学などを挙げることができる。

2階の「スペッコラ」には、フランス国立ケ・ブランリ美術館との協働により「ケ・ブランリ・トウキョウ」のモバイル展示スペースを設けた。これは上記美術館との中長期にわたる契約のもと、フランス側から一定量の展示品を借用展示する事業で、年一度程度のペースで展示物を入れ替えてゆくことになる。これは総合研究博物館が推進する「モバイルミュージアム」事業をフランスの国立館がおこなうということであり、国内では初めての試みとなる。

館内の2ヶ所で使われている什器は、国立台湾芸術大学デザイン科木工専攻の院生の作品である。博物館は同大学芸術文化政策研究所と部局間協力協定を結んでいることから、同大学のデザイン科で「インターメディアテク」(IMT)使用の什器の制作コンペを行い、第一席と第二席に輝いた作品を収蔵した。これは大学間の協働研究のひとつのあり方を提起しようとするものである。

「インターメディアテク」(IMT)の展示事業を、国外の研究機関へのモバイル展示の「輸出」と連動させる試みも計画されており、企画の立案においては海外での展示を念頭においた組み立てが必要となる。

館内のゾーニング

「インターメディアテク」(IMT)の専有空間は、ロビー、展示スペース、収蔵展示スペース、講義室、収蔵庫、研究室、事務室、商業スペース等にゾーニングされる。これらのうち、一般に公開されるのはロビー、展示スペース、収蔵展示スペース、講義室と商業スペースである。収蔵庫、研究室は、集会、ワークショップ、ヴォランティア活動など、特定の条件下でのみ公開される。

展示スペースは、常設展示スペース、準常設展示スペース、企画展示スペースの3タイプからなる。常設展示スペースには、館内の最大空間をそれに充てた。旧局舎のオリジナルの状態にもっとも近いかたちで復元された空間に、19世紀の博物場のそれを想起させる、伝統的な展示手法を試みた。準常設展示は、展示の一部を定期的に入れ替えつつ、全体が維持される展示をさす名称で、上記と同様に復元された展示スペースに、レトロ・モダンなガラス展示ケースを並べる。企画展示スペースは20世紀型の「ホワイト・キューブ」空間で、ここでは年度計画に基づき、各種のテンポラリーな企画展が開催される。

収蔵展示スペースは、周囲がガラスによって囲われたスペースで、二方向から山階鳥類研究所の本剥製コレクションが稠密度に収蔵されているさまを透視することができる。

小中高校生・大学生・社会人・ヴォランティア複合教育

「インターメディアテク」(IMT)は社会貢献の一環として、社会人・大学生・ヴォランティアを対象とする社会教育を実践する。その内容は、二種に大別される。ひとつは恒常的・継起的なもの、もうひとつは一時的なもので、可能な限り、定期的にそれを開催する。いずれにしても、社会層、年齢層、学歴・

職歴、参加動機などによる分別をおこなわず、好奇心と意欲に溢れる市民に対し、つねに開かれたものとする。「学ぶ者」と「教える者」が同じテーブルに就いて、立場の相互入れ替えゲームを実践できるようにすることが望ましい。

まず前者についてであるが、形式的にはゼミナール、レクチャー、ワークショップ、現場作業などのかたちをとる。講師となるのは、「インターメディアテク」(IMT)の専従スタッフと特任キュレーター、ゲスト講師、さらには東京大学教員であり、東京大学から参加する学生ならびに大学院生に対しては、ゼミナールへの参加をもって大学の授業として単位認定できる。社会人とボランティア等に対しては、参加希望状況を鑑み、人数制限等をおこなうこともあり得る。

後者については、修学旅行生など、学生の団体見学を積極的に受け入れることとする。このため、週一回程度、団体受け入れのため、午前中二時間程度の特別時間枠を設けることにする。展示解説には「インターメディアイト」と呼ばれるボランティア・スタッフが当たる。また、月一回程度、一般来館者を対象とするギャラリー・トークをおこなう。

トークショー、パフォーマンス、音楽会、上映会など、各種の催事を単発的におこなう。企画を担当するのは、上に掲げた講師陣のメンバーであり、企画展、継続的事業との関わりを考慮しながら、活動プログラムを策定していく。

原則無料の事業展開

「インターメディアテク」(IMT)は、国際博物館評議会の規約ならびに内国博物館法の条文を尊重し、特段の必要性が認められる場合を除き、原則として観覧料を徴収しない。それにより、幅広い公衆に対し、可能な限り開かれた施設とする。そのことは、日本郵便と東京大学がおこなう社会貢献事業として、国籍を問わず、より多くの人々に、知的な刺激や感動的な興奮を与えることで、国内外に向けて力強い情報発信をおこなうという、施設に付託された使命に適う。

また、観覧料を無料化することで、専従スタッフは、より実験性の高い展示やイベントをおこなうことができる。観覧料という対価に見合った収益や集客を考える、従来の非文化的な経営効率論から抜け出し、より挑戦的で、より刺激的な展示企画やデザインを実行する、そのためにも入館無料原則を堅持してゆきたい。